

教宣 せぶん

考察 3つの道

昨年10月7日の「制度廃止」の通知・提案以来、私たちは白紙撤回を求めるのではなく、「不利益を被らない」という基本方針のもと、3つの選択肢をつくり、その中でたたかいをすすめてきました。RAとして継続雇用を望む道、内勤としての雇用を選ぶ道、代理店にすすむ道、どの道を選ぶのがそれぞれの「選択」を尊重し、ともにたたかっていこうと決めました。もちろん自らの人生がかかった道を選択するわけですから、それぞれの選択が同じように尊重され、同じように扱われなければなりません。代理店への転進募集が締め切られ、原告団の人数も確定した現在、「選択」はハッキリし、各々がそれぞれの道にすすんでいます。

さて、そんな状況のなか、ひとつ思うところがあります。それは3つの選択を「人生の選択」という視点ではなく、「運動論」という視点でとらえた時の考察です。人生の選択という視点では、言葉は適切ではありませんが、わかりやすく言うと、それぞれの道が同じように尊ばれなければならないので、全体を100にした場合、それぞれの道は33%の重さがあったと言えます。しかし、運動論的に見れば、こうはならないと思います。なぜなら、全員が代理店に転進する道を選んだとしたら、今後の運動が成り立たないからです。私たちの「ルーツ」もなくなります。そして、働くものの立場に立った「こんなひどい会社の出方は許されない」という訴えがどこにも届きません。会社の「基準」を法に照らすこともできませんし、同じ「企業の横暴」が繰り返される可能性に対して「歯止め」にもなりません。ですから運動論的には「代理店への転進の道」は決して主流にはなり得ないと思います。

いま、「代理店への転進の道」を選んだ仲間が、会社にとどまってたたかう道を選んだ私たちを支援してくれるのは、こういった運動論的視点を十分に踏まえてくれているからだと思います。自分は「人生の選択」という視点で、会社に留まる道を選ばなかったけれども、「自分が育ってきたルーツをまもって欲しい」「正しいことを言う者が勝利することを証明して欲しい」「会社の企業論理に一矢を報いて欲しい」。そんな「意識」や「思い」があればこそ、都労委に足を運んでくれたり、カンパをしてくれたり、会社に向かってともに抗議のシュプレッヒコールを浴びせてくれたり、裁判を見に来てくれたり、激励の言葉をかけてくれたり、地方の抗議要請に馳せ参じてくれたり、一緒にピラを巻いてくれるのだと思います。

「人生の選択」という視点と「運動論」という視点。全損保という「働くものの立場に立って運動をすすめる」組織で旺盛にたたかってきたものは、決してこの2つの視点を忘れて欲しくはありません。